第４章　対象地域の調査

１．ワークショップ対象地の選定

第１回調査検討委員会で示した３つの観点①集落の取り組み意欲、②集落元気づくりの実現性、③外部支援等の可能性・継続性に加え、第１回調査検討委員会での意見を考慮し、宮崎県児湯郡西米良村にある八重集落を対象集落として選定した。

調査対象地の選定の観点

観点①自治体等との協力関係による選定

○平成19年度現地調査対象地（17自治体）から選定

福岡県（星野村、小郡市）、**佐賀県**（佐賀市、武雄市）、**長崎県**（小値賀町、対馬市）、
熊本県（山都町、小国町、南小国町）、**大分県**（竹田市、日田市）、
宮崎県（西米良村、高千穂町）、**鹿児島県**（南さつま市、薩摩川内市、南大隅町、瀬戸内町）

観点②集落の高齢化率･世帯数による選定

○高齢化率　概ね50%～、世帯数　概ね20～50世帯の集落から選定

《対象集落》 佐賀市(1)、小値賀町(2)、西米良村(1)、薩摩川内市(1)、南さつま市(1)、 瀬戸内町(2)

観点③地理的条件（中山間地域，離島）による選定

○今回調査では中山間地域を対象とすることとし、中山間地域となる集落を選定

《中山間地域》 佐賀市(1)、西米良村(1)、南さつま市(1)
《離　　島》 薩摩川内市(1)、小値賀町(2)、瀬戸内町(2)

観点④対象となる集落の取組意欲等による選定

○アンケートより取り組み意欲、元気づくりの実現性、行政やＮＰＯなどの外部支援の可能性を把握

○他事業の実施状況を確認し、類似事業の重複を回避

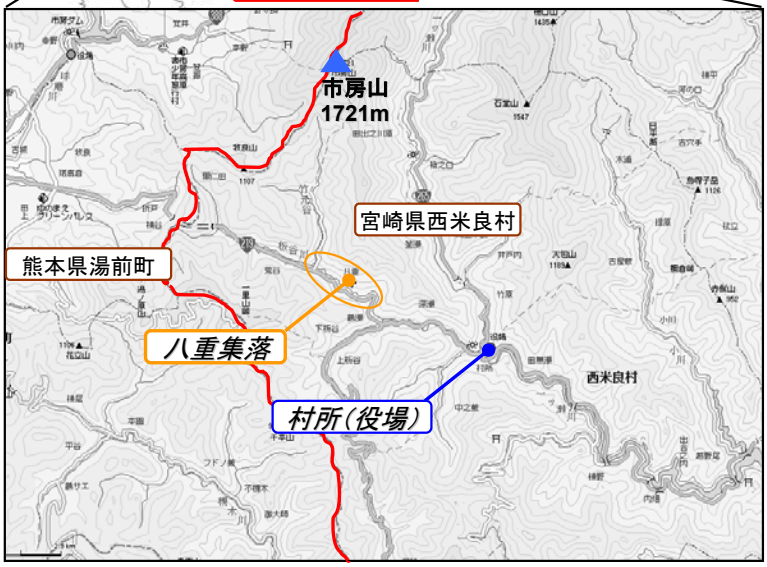
《選定集落》 宮崎県　西米良村　（八重集落）

2. 対象集落の現地概要

（1）八重（はえ）集落の概要

集落の位置：宮崎県児湯郡西米良村の西部、熊本県境に位置する集落

集落の特徴：平成元年に有志一同による物販所を開設し、ファミリーフィッシング等のイベントをやっていたが、平成１６年の災害以降行われていない。当時のメンバーは現在７０歳代。５０歳代～６０歳代が少なく、新たに集落づくりを行う次世代への引き継ぎが課題。若手としては消防団員を構成する8名である。集落内にある村営の定住促進住宅にはIターン者を含む2世帯が居住。



集落中心部にある集会所。平成16年の台風時に水に浸かる。以来住民は大雨が来ると自主的に集落外へ避難する人が多い。

集落中心部より上流にある「吐合地区」では、近年、高齢単独世帯が増えている。

（2）全世帯アンケートから見た八重集落の現状

①アンケートの配布・回収について

- アンケートは八重集落の全世帯の世帯主の方へ送付し、各世帯から直接回収を行った。
- 配布数 32 に対し、回収数 26 世帯、回収率 81.3%であった。

②集落の共同活動の重要性（図１）

- 重要であると思われているのは、「共有資産の管理、集落内での葬儀の実施、寄り合い、他出家族との絆の強化、行政と一緒に取り組む地域づくり活動、住民の足の便の確保」であった。

③集落への居住継続意志（図２）

・ 今後の集落への居住意向については、「今後とも住み続けたい」（17 世帯）が最も多く。次いで「状況によっては離れざるをえない」（6 世帯）となっている。

④居住を継続する上での不安（図３）

・ 居住を継続する上での不安の上位３項目として、「土砂崩れ、崖崩れ等の発生の危険性が強い場所がある」（18 世帯）、鳥獣被害等が増加している」（13 世帯）と 回答した世帯が多くなっている。

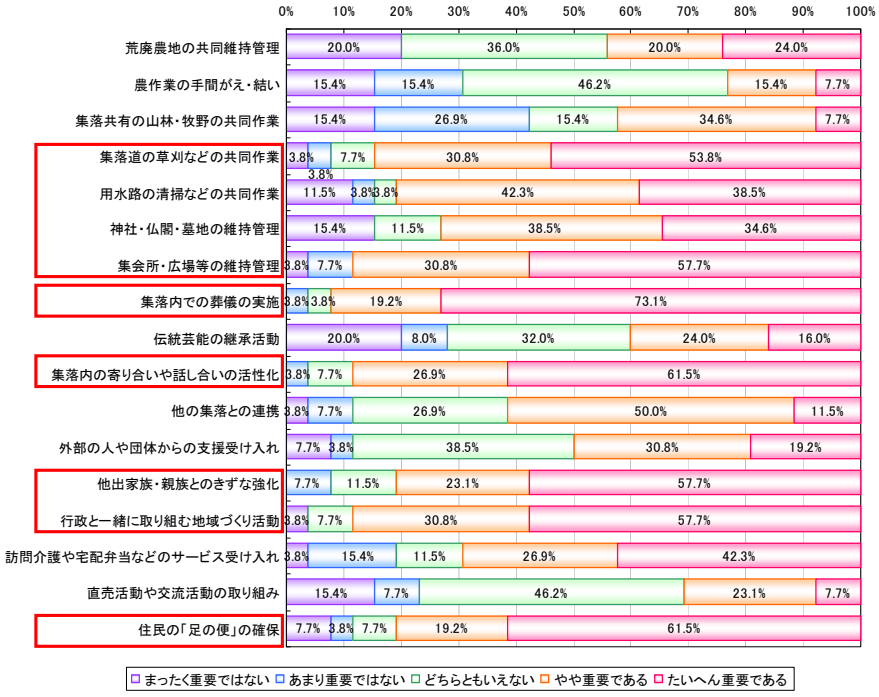


図１　集落の共同活動の重要性について

⑤今後居住を継続する上で必要なもの

・ 最も重要な項目として、「集落内の相互扶助」（11 世帯）、「国や自治体の支援・協力」（8 世帯）が最も多くなっている。

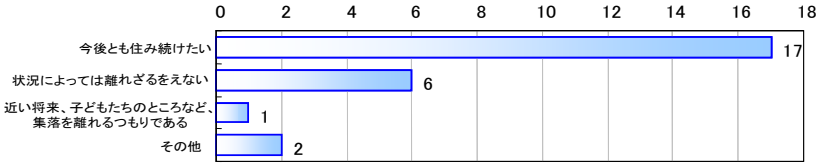


図２　集落への居住継続意

⑥集落内あるいは近隣の地域資源

・ 集落内あるいは近隣の地域資源としては、「御大師堂、豆漬け谷の湧水、板谷川、下相谷の山桜、光男桜、竹之元谷」が挙げられる。

⑦集落内の活用可能な資源

・ 集落内あるいは近隣の活用可能な地域資源としては、「遊休地や耕作放棄地や空き家」が挙げられる。

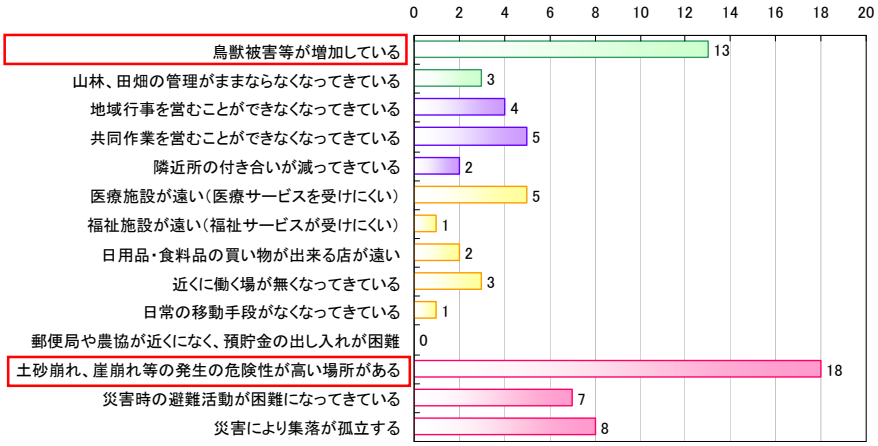


図３　居住を継続する上での不安

⑧集落内あるいは近隣の食材を用いた自慢の料理

・ 集落内あるいは近隣の食材を用いた自慢の料理としては、「山菜（サトガラ、ウド、ワラビ、イタドリ、筍、ワサビ、タラの芽）、魚」が挙げられた。

⑨子孫に残したい伝統芸能、特技・手業

・ 残したい伝統芸能、特技、手業としては、「伐採技術、炭焼き、米良寒蘭の培養、木工、釣り、狩猟」が挙げられた。

⑩集落元気づくりへの取組意向（図４）

・ 集落元気づくりへの取組意向としては、「取り組みに向けて集落内の話し合いをしたい」（8 世帯）、次いで「今のところ取り組む気はない」（7 世帯）、「周辺集落と協力して取り組みたい」（5 世帯）の順であった。

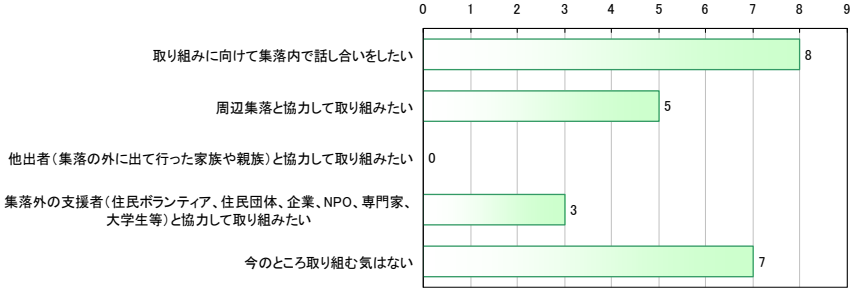


図４　集落元気づくりへの取組意向

3．ワークショップの概要

（1）ワークショップの運営方針

①ワークショップの開催回数

3 部構成とした。

②ワークショップの参加者

ワークショップの参加者は集落の住民と、必要に応じて外部からの支援者（他出者、学識者、地元事業者、NPO、行政等）も含めて実施を検討した。

《ワークショップの回数と開催テーマ》

第1部　現状の問題を見てみよう
世帯毎（他出者、後継者等）の家族構成や集落の資源を把握することで集落の現状を共有

↓

第2部　自分たちの将来を予測しよう
第1部の集落の10年後の集落の実態を予測し、集落の問題・課題の抽出と取組メニュー

↓

第3部　集落の未来について語ろう
第2部の集落の問題・課題を解決するための集落元気づくりの具体化

4. 第1回ワークショップの概要

西米良村八重集落の第１回「集落元気づくりワークショップ」では、世代別に４班に分かれ、集落人口ピラミッドや集落現況マップを作成しながら、集落の現状について話し合った。真剣な議論の中にも、笑いが包む和気あいあいとした雰囲気で、熱気にあふれたワークショップとなり、集落の１０年後の未来を考え、元気を出していく取り組みについて具体化していく。

（1）開催日時・場所

日時：平成 21 年 2 月 10 日（火）18:30～21:15

場所：宮崎県西米良村（八重集落）　八重活性化センター

（2）開催テーマ及び参加者

開催テーマ「現状の問題を見てみよう」

参加者数：29 名（4 グループに分かれて議論）

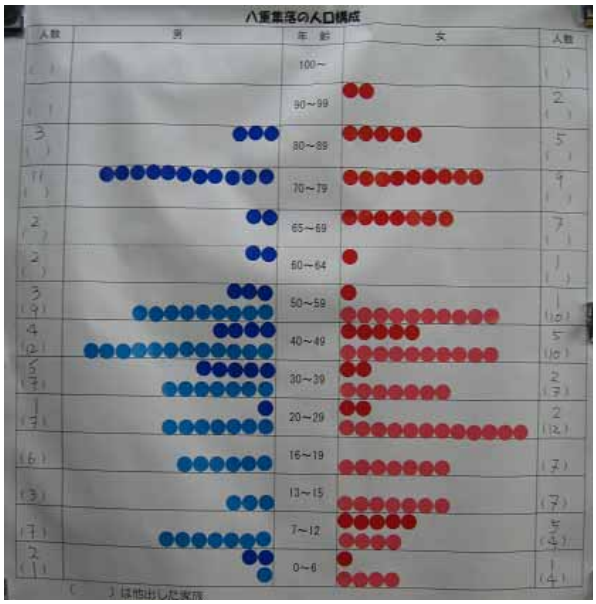
（3）目的

① 集落の課題を導き出すため、集落の現状（人口、資源や集落維持における懸念事項）をまとめ、集落の現状を参加者全員で共有する。

② 世帯毎の現状（世帯構成、他出者、後継者の有無）を把握し、集落の将来人口について考える。

（4）人口ピラミッド

集落の人口構成、集落外に居住されている集落血縁者（他出者）の状況を把握するために、人口ピラミッドを作成した。



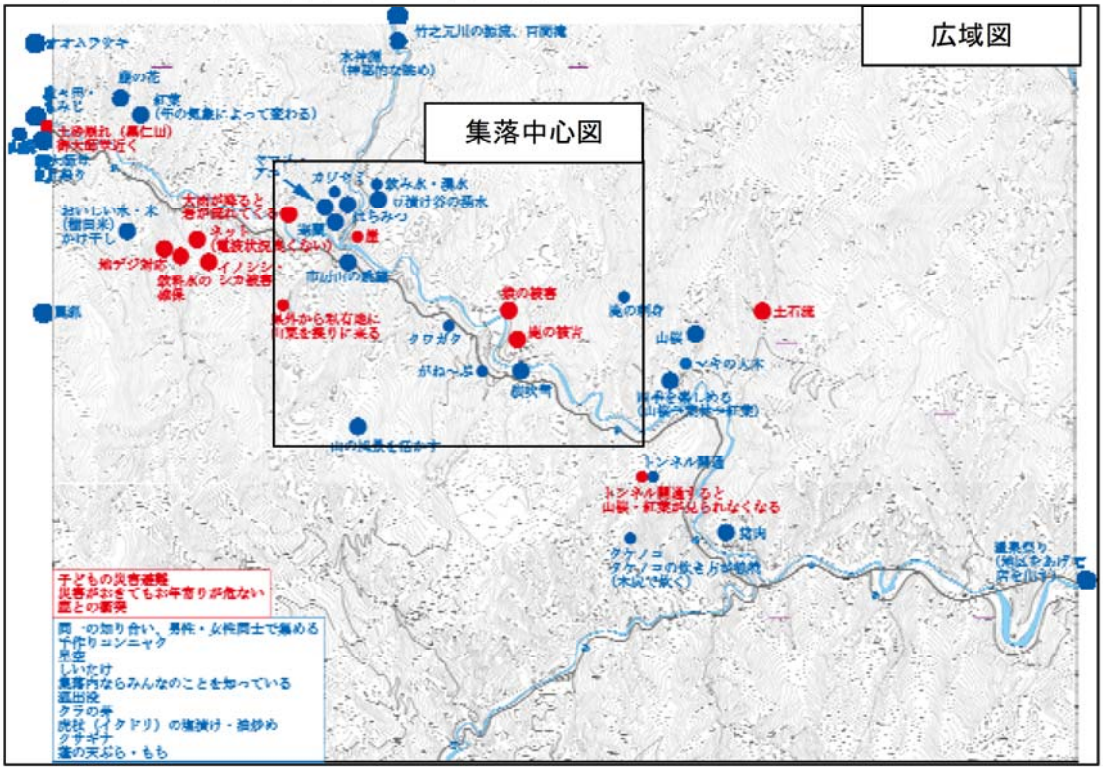
- 八重集落の人口は 73 名で、他出者を含めると 186 名となる。
- 集落の現在の高齢化率は 53%で、他出者を含めると 21%となる。
- 60 歳代は、居住者と他出者共に少ないが、70 歳代は多く居住している。
- 40～50 歳代の居住者が、昔、進学や就職で他出し、その結果として、その子世代にあたる 10 歳代～20 歳代が集落に少ない状況となっている。

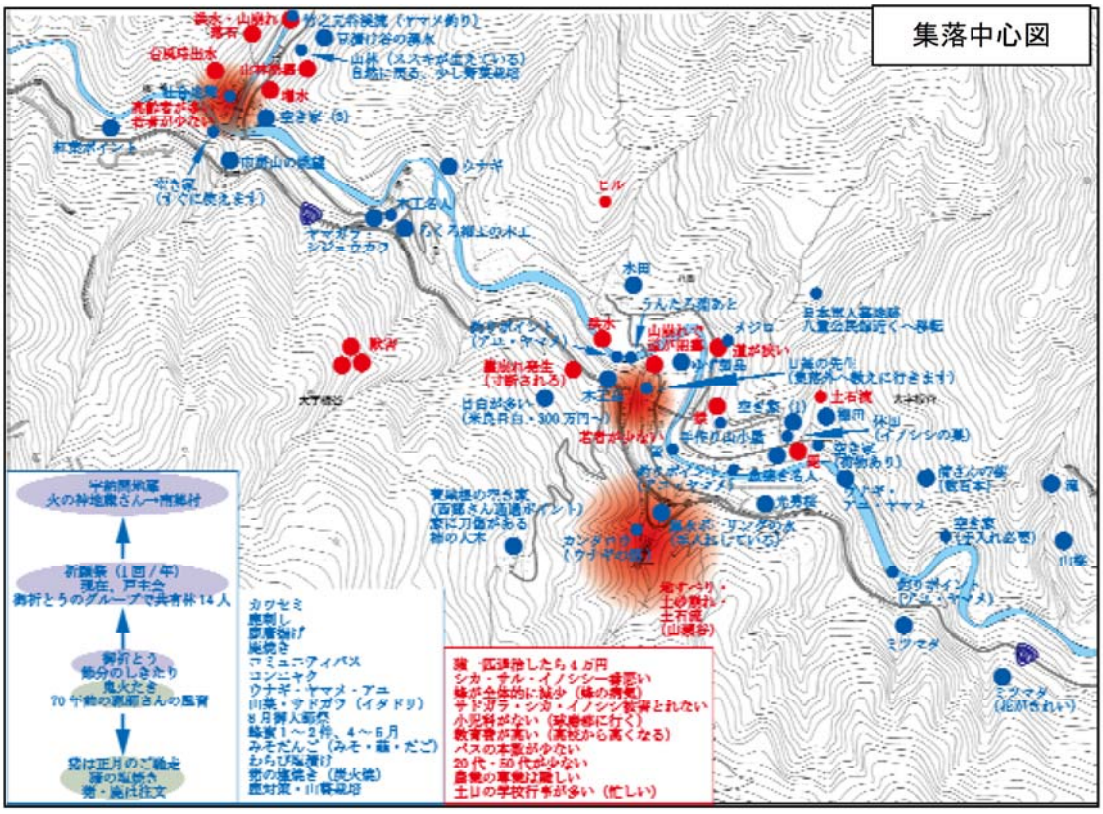
上段：居住者　下段：他出者

	男性	女性	合計	構成比率（%）
65 歳以上	16（ 0）	23（ 0）	39《 39》	53《21》
15～64 歳	15（41）	11（46）	26《113》	36《61》
15 歳未満	2（11）	6（15）	8《 34》	11《18》
計	33（52）	40（61）	73《186》	

（5）集落現況マップ

ワークショップにて各グループで議論された成果を以下にまとめた。図面は集落周辺も含広域図と集落中心部を拡大した集落中心図の 2 枚で作業を行った。赤字が不安、青字が資源である。地図上に表すことが出来ない「不安（例えば教育や医療不安）」「資源（伝統文化や郷土の味など）」は欄外に記入を行った。





（６）第１回ワークショップの総括

① 地元コーディネーターと協働で取り組んだ事前準備や外部からの参加者がうまく会場の雰囲気を作り上げられた（参加の場の創出）

② 区長への挨拶と予備調査により参加者ニーズを捉えることが出来、参加者の取組意欲につながる話し合いが出来た。

③ 全世帯アンケート調査により統計に表れない世帯毎の実態把握を行えた。（他出者の実態等）

④ グループ分けを年代別に行うことで、話しやすい雰囲気が生まれた。

⑤ 現在と将来の人口構成を人口ピラミッドで見せることで、世代のバランスが悪い実態などの情報を共有できた。

⑥ 住民が多く感じた八重集落の不安及び資源の情報の共有がなされた。

⑦ 代表的な感想としては、新たな発見があった等ワークショップが日常ではなかなか経験できない気づきの場になったとの意見をいただいた。

5. 第2回ワークショップの概要

小雨が降る中、八重活性化センターには、約 30 名が集まり、今回も熱心な議論が行われた。

第 1 回ワークショップに続き、集落元気づくりの取り組みとして考えられるプロジェクト企画を、テーマ別に 4 グループに分かれて話し合い、集落として取り組むべき「集落元気づくり」の骨格を作り上げた。

集落の現況を見つめ直し、将来を予測する中で、新たに見える集落の問題と課題。その共通認識の中から、世代間の意識差を解消し、お互いのやりたいことの話し合いに参加者の表情は真剣そのものであった。

（1）開催日時・場所

日時：平成 21 年 2 月 27 日(金)　18:30～21:15

場所：宮崎県西米良村（八重集落）　八重活性化センター

（2）開催テーマ及び参加人数

開催テーマ「自分たちの１０年後を考えてみよう」

参加者数：25 名（4 グループに分かれて議論し、グループ構成は話し合いたいテーマ別に分かれていただいた）

（3）目的

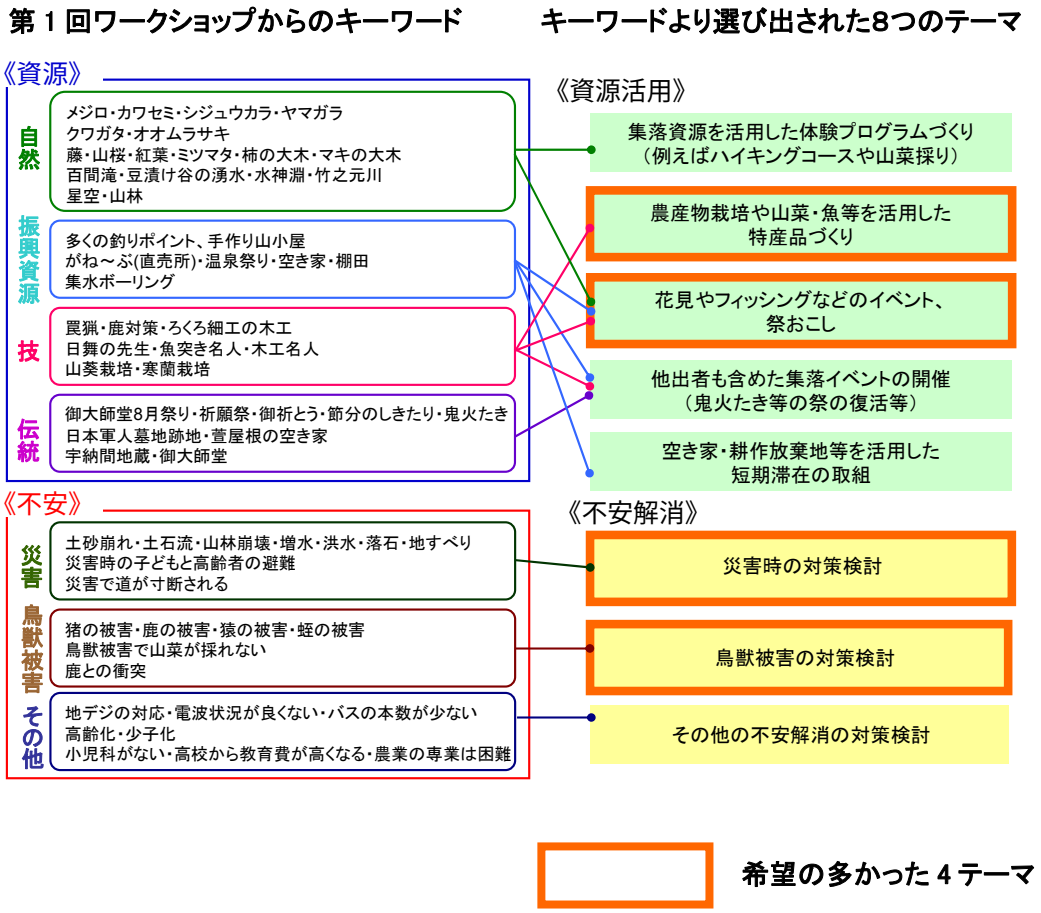
10 年後の集落の姿を考え、集落の問題・課題の抽出と取組の話し合いを行う。

その際、第 1 回ワークショップにおいて抽出された不安と資源のキーワードから、「不安解消」、「資源活用」につながるテーマ別に議論を実施し、集落元気づくりに向けた取組の方向性を決めることを目的とする。

（4）実施方法

第１回ワークショップで出された「資源」の活用や、「不安」の解消に向けた８つのテーマを選出し(下図)、参加者の希望より４テーマ（グループ）に分かれて話し合いを進めた。

第1回ワークショップからのキーワードと選出された4つのテーマ



（５）作業結果

グループ①「集落資源を活かした都市交流」の話し合いの結果

鳥獣被害が昔から多い八重では、鳥獣被害を受けない作物を作って生計を立てていた先人の知恵を参考に、八重の特産物を作ることが考えられた。

使うものは、コンセプトの「MADE　IN　そこらへん」にも表れているように、八重に自生している数々の植物。その一つが「ミツマタ」。ミツマタは紙の原料にもなるうえ、早春にはきれいな黄色の花を咲かせ、八重での紙の生産を復活させるとともに、八重に新たな季節の彩りを加えることにもなるだろう。このほか、茶の実からとれる油を採取して商品化、カズラを使ったクリスマスリース作り、草木染めなどが考案された。

このように、「特別な工夫をすることなく、鳥獣被害の有無に左右されない植物を使うなど、自分たちの力でできることからやること」が八重の特産品づくりプロジェクトの方向性となった。

テーマ①　農産物栽培や山菜・魚等を活用した特産品づくり

プロジェクト名：

「MADE　IN そこらへん」～ミツマタ・キヨシの花だらけ村～

■現況・問題・課題

獣害が昔から多い八重では、獣害を受けない作物を作って生計を立てていた先人の知恵を参考に、八重の特産物を作ることが考えられる。

■取組の内容

《ミツマタの活用》
・早春にはきれいな黄色の花を咲かせるため八重に新たな季節の彩を加える
・ミツマタは紙の原料にもなるため、八重での紙の生産を復活させる

《茶の実の活用》
・茶の実からとれる油を採取して商品化

《カズラの活用》
・カズラを使ったクリスマスリース作り

《草木の活用》
・草木染めなど

八重に自生するミツマタ

グループ②「花見やフィッシングなどのイベント、祭おこし」の話し合いの結果

平成 16 年の台風災害から集落の寄り合いが減り、それまで行っていたファミリーフィッシング大会など、集落のみんなで楽しむことがなくなった。

今、集落では警察官だった光男さんが１０年前に植えた「光男桜」が立派に育っている。

参加者からは「集落の周辺に自生しているミツマタを栽培して、光男桜に彩りを与えたい」、「花見でバーベキューが出来たら」、「夜桜を楽しむためにライトアップをしたら夜も楽しめそう」などのアイデアが次々と出された。

さらに、「まずは自分たちが楽しむのが一番」、「外の人と一緒に楽しみむのはその後でいいや」、「いつも炊きだしばかりしている婦人部も楽しめるように、外から屋台に来てもらえるともっと盛り上がるよね」などなど、欲張りなプランに発展していった。

ファミリーフィッシングの頃のようにみんなが、前日からのわくわくした雰囲気も楽しみ、イベントを盛り上げて、集落のにぎわいが続くことを願うばかりだ。

テーマ② 花見やフィッシングなどのイベント、祭おこし

プロジェクト名：

「八重夜桜祭り」 ～先ず地元→村内→村外～

■現況・問題・課題

平成16年の台風災害から集落の寄り合いが減り、それまで行っていたファミリーフィッシング大会など、集落のみんなで楽しむことがなくなった。
集落では警察官だった光男さんが植えた「光男さくら」が立派に育っている。

■取組の内容

《光男さくらの活用》
・ミツマタを栽培して、光男さくらに彩りを与えたい
・花見でバーベキューがしたい
・夜桜を楽しむためにライトアップ
《イベント広場の確保》
・駐車場、トイレ、イベント広場の確保
《取組の展開方法》
・先ず地元→村内→村外

光男さくら

グループ③「災害時の対策検討」の話し合いの結果

平成 16 年 9 月、台風 1８号が八重を襲い、土砂崩れ、避難所の床上浸水、避難道路の寸断など、甚大な被害をもたらした。八重の集会所には 20 名が避難したが、何人かの住民は避難せず自分の家にとどまっていた。

参加者からは「避難がバラバラだと連絡がとれないので不安」、「避難生活がどれくらい続くのか、最後は食料が尽きた」、「10 年後の消防団は 4 人」、「住民全員の避難場所リストって更新されていたっけ？」など、避難生活の苦労話や災害時の問題点が次々と出された。

あのような怖い思いは二度としたくない。そんな思いから「消防団の定年を 10 年延期」、「避難用食料備蓄をしよう」、「備蓄食糧が古くならないよう、定期的に食べるイベントを開催しよう」等と具体的な解決策が飛び出し、最後は避難を拒んでいた方も「俺も今度からみんなと避難する！！」と宣言するにいたり、本日の最も大きな成果へと結びついた。

最後に参加者から「消防団の定年は 79 歳でいいよ。俺、80 歳だから」との迷言も飛び出し、一同大いに盛り上がった。

テーマ③ 災害時の対策検討

プロジェクト名：**「災害に負けない八重地区」**

～みんな進んでニコニコ避難（清光さんといっしょ！）～

■現況・問題・課題

平成16年9月、台風18号が八重を襲い、土砂崩れ、避難所の床上浸水、避難道路の寸断など、甚大な被害をもたらした。八重の集会所には20名が避難。何人かの住民は避難せず自分の家にとどまる等一体的な行動がとれなかった。

■取組の内容

《災害時の体制強化》
- **避難者リストの作成・更新**
- **消防団の定年延期**

《避難長期化対策》
- **食料備蓄(3日）程度**

《集団避難体制の確立》
- **避難時の声かけ**
- **一体的な避難行動体制確立に向けた避難訓練の実施**
  (消費期限が迫った食料を使った炊き出し訓練）

新たに整備された松之元集会所

グループ④「鳥獣被害の対策検討」の話し合いの結果

八重では猪、鹿、猿による鳥獣被害が多く、主に畑や造林地で起こっている。当初は、農作物が最も被害を受けていると予想されたが、それに反し参加者からは「農作物の被害は自分の家で消費する分だけ。最も深刻な被害は林業だ！」との意見が出された。

一般的に、鳥獣被害対策は「防護柵設置」、「作物変更」、「捕獲」の３種類だが、広大な山林を守るためには、防護柵や作物変更では対応できない。

その後「狩ること！」を中心として議論が白熱し、「猟友会に猟をしてもらう」、「猟友会の捕獲率は低い」、「鹿１頭の奨励金は五千円だ」等々の話題が飛び交った。また、自分たちでできるなら自分たちでやりたい！との思いから「我家で猟師を育てよう！」そして、鳥獣を撲滅して昔の森を取り戻そうというプロジェクトの方向性が固まった。

テーマ④ 鳥獣被害の対策検討

プロジェクト名：

「我が家の猟師さんで昔の森を取り戻そう」

～シカ・イノシシ・サルの撲滅～

■現況・問題・課題

八重では猪、鹿、猿による鳥獣被害が多く、主に畑や造林地で起こっている。
なかなか抜本的な解決策が無く、困っている。

■取組の内容

《猟師の育成》
・住民自らが狩猟免許、罠師の資格を取り、鳥獣を撲滅
《鳥獣資源の活用》
・捕獲した食肉を食べる→特産品化
《その他動物の活用》
・オオカミ、七面鳥、犬の活用

ユズ園での剥皮被害

鹿の被害が最も顕著

（６）第２回ワークショップの総括

①参加者が希望する集落元気づくりテーマについて話し合い、話し合いへの参加意欲向上に結びついた。

②先行事例の紹介による情報の提供を行い、新たなアイデアが生まれたケースと、既に参加者が実施済みで気乗りしないケースもあった。

③代表的な感想としては各プロジェクトとも参加者がやってみたいと思うものに仕上がった。

④住民が実行できそうな取組と意気込み

・《ミツマタ　キヨシの花だらけ村づくり》

ミツマタ栽培を本気で考えています。観光産業として。村民全体で考えて努力すれば、4～5 年で完成する。

・《八重桜祭り》

まずは、あらゆるものを使って、地元で楽しむ事から始められるという事もあり、子育てで忙しい日々の今でも出来そうな気がしました。

・《災害に負けない八重地区》

これからも八重で生活する上で、災害に負けない心が必要です。災害にいつあってもいいように、防災についてなど、家内でも話し合いをしたいと思います。

・《昔の森を取り戻そう》

どうしても被害を減らしたい。狩猟免許を取るぞ。

⑤鹿児島大学の山田誠先生の講評

「本日は非常に幅広い年代の方が集まり、楽しそうに議論をしているのが印象的でした。皆さんの一番良いところは「自分たちが楽しく」、そして「やりたいことがある」ということが第三者にも伝わってくることだと思います。

また、今回は別々のテーマについて議論しましたが、それぞれのテーマが関係していることが、話し合いを通じて感じられたかと思います。お互いが力を合わせると参加者が多くなります。一つのイベントで、2 つ 3 つの目的を達成することが、少ない人数で高齢化が進む、あるいは子供を抱えていて忙しい状況では、非常に重要です。」

6. 第3回ワークショップの概要

第 2 回ワークショップ同様、小雨が降る中、八重活性化センターには、31 名の方が集まり、熱心な議論が行われた。

最後のワークショップであり、集落元気づくりに向けた取組の実施主体について、地区活動を行っている団体別(消防団、女性部、地区執行部他)に分かれて議論を行った。

自分たちが考えた４つのプロジェクトを何から始めるのか？既に実行され始めた取組や、なかなかやり手が見つからない取組まで、集落の未来を話し合う、参加者の発言一つ一つには力がこもっていた。

（1）開催日時・場所

日時：平成 21 年 3 月 9 日(月)　18:30～21:30

場所：宮崎県西米良村（八重集落）　八重活性化センター

（2）開催テーマ及び参加者数

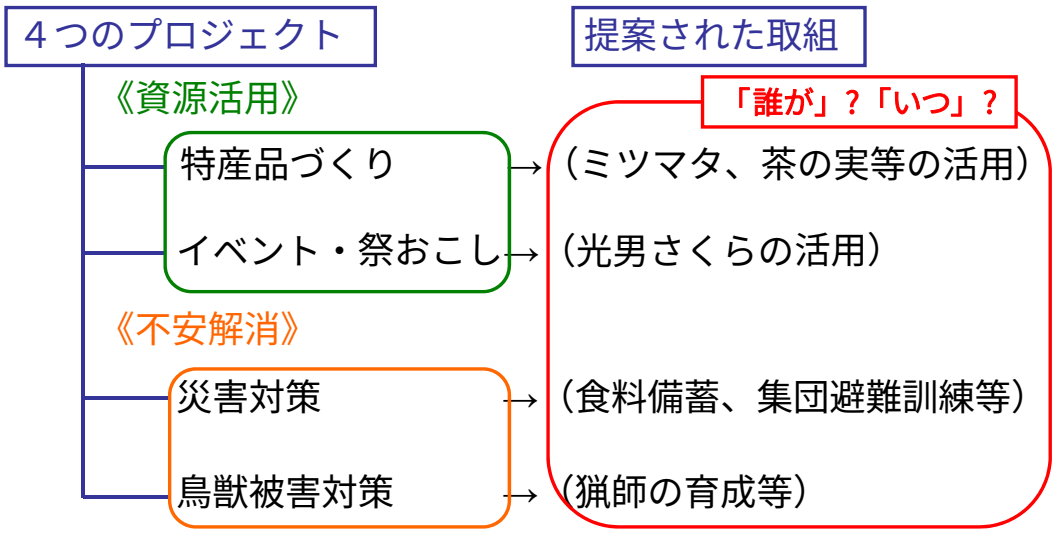
開催テーマ「集落の未来について語ろう」

参加者数：31 名（消防団、女性部、地区執行部の 3 グループに分かれ、四面会議システムによる全体議論）

（3）目的

第 2 回ワークショップで話し合われた 4 つのプロジェクトの実現に向け、「誰が」、「いつ」、「何を」行うのかを話し合い、特に今すぐ出来ることを決める。

第2回ワークショップで話し合われた4つのプロジェクトの実現に向け、「誰が」、「いつ」、「何を」行うのかを話し合い、特に今すぐ出来ることを決めることを目的としています。



（4）作業結果

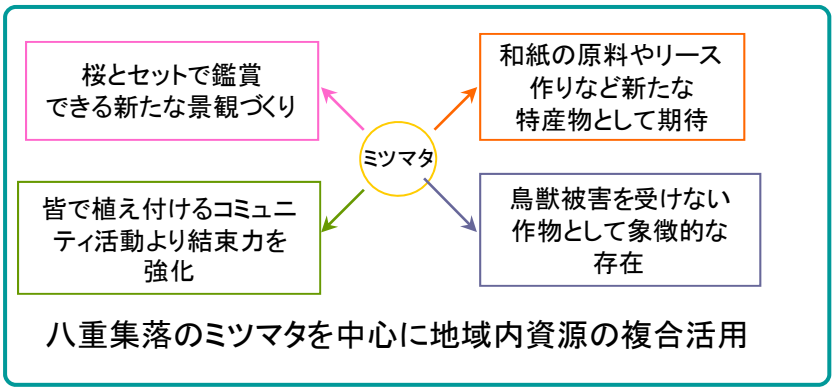
４面会議システムにより、暮らしの不安解消への様々なアイデアが話しあわれる中で、全てのテーマを全員で共有することが可能となり、八重集落のミツマタを中心として地域内資源の複合活用を図っていく合意が形成された。

具体的には、まずは、ミツマタの栽培と植え付けからスタートし、ミツマタと桜のセットによる新たな景観づくりや、ミツマタを和紙の原料やリース作りなど新たな特産物づくりに役立て、また、コミュニティ活動としてミツマタを皆で植え付け集落の結束力を強化すると共に、鳥獣被害を受けない作物として集落の象徴的な存在とすることである。

上記のような話し合いを元に、八重集落の集落元気づくりテーマが、次のように選出された。

＜八重集落の集落元気づくりテーマ＞

「ミんな　ツくって　マもろう　タから　～とりあえずミツマタ～」



（5）第３回ワークショップの総括

①４面会議を用いた取組への合意形成

「誰が」「いつ」どの取組を行うのかの話し合いを、集落内の既存の実行単位での議論としたことで、年配者の知恵・経験に圧倒されながらも、相互への期待も語られ、参加者のやる気を引き出すことにつながった。

課題としては、自分たちではできない課題にぶつかった時、人的支援や助成制度などの支援策として助言できるアイデア（情報）の充実が必要である。

②難易度による実行期間の分類

先ずどこから手がけるのか、できるところからやろう、という気運が高まり、結果として、とにかく「集落の行事にしよう」という実行性の高い提案が出された。

しかし、“金にならなきゃ、やっている暇がない”というような意見もあり、資源活用への知恵や情報、助っ人が必要である

③集落の全体目標の共有化

暮らしの不安解消への様々なアイデアが話し合われる中で、全てのテーマを全員で共有し、集落活動の参加者の目標を“ミツマタ”に結実させることができた。

今後は、実際にやろうとすると難しい課題が出てくるが、それを解決するためのツール（ネット利用や効果的な事例、制度紹介）の提供と、自分たちによる解決力を高めること、高められるという自信を持てるように導くことが必要である。

④ワークショップに参加しての代表的な感想

- 今の私達に出来るのだろうか？という事を考えさせられました。何をするにも限界が有ったり、でも出来るゾ！というところまでの発見も有り、この三回の収穫は大きいです。
- 若者から高齢の方までの会の中で、全ての人が内容を理解し、一つのことを全員で考える方法が素晴らしいと感じました。
- 意外と難しい問題が山積みなのだなと思った。
- 前二回は、思いついた事や地区の方々の話を聞いたりと面白い発見が多かったのですが、今回の現実に実行となるとなかなか難しい事が多いな、と思いました。現実はなかなかです。
- 地域の人たちの意識、気付き、見方などに少しでも変化が見られたようで良かった。これが全て良かったってことにはならないかもしれないが、きっかけづくり的にはとても良かったと思う。又、総会前のこの時期というのが、より良かったと思う。

⑤宮崎大学の吉武先生の講評

「本日はみなさんが積極的に話をされ、難しい問題もありましたが「とりあえずミツマタ」をキーワードにして、活動しようと決まったことは大変良かったと思います。

今から活動を行うのは皆さんであり、誰かがチェックするからやるというモノではありません。

もし、声をかけていただければ応援にきて、一緒に楽しもうというスタッフの方もたくさんおられると思います。

今後も、皆さんが色々な人と関わり、みんなが楽しめ、それぞれが何か役割を持っていることを、ミツマタを機にして出発できれば、活動に広がりが出てくると思いますので皆さん協力して頑張って下さい。」

プロジェクトを実行する際は我々も呼んでいただけることを楽しみにしております。」

7. ワークショップの総括

ワークショップ開催を通じて、今回の集落元気づくりは、参加の場の創出に始まり、元気づくりの実現に至るまで、５段階（第０段階～第４段階）で整理されることが明らかになった。

（1）第０段階　参加の場の創出（ワークショップの事前準備）

① 住民への参加の呼びかけ

② 区長への挨拶と予備調査

③ 全世帯アンケート調査の実施

課題 → 定量的な統計データのみでは得られない集落実態の把握が不可欠であることが明らかになった。

（2）第１段階　気づきの誘発（第 1 回ワークショップ）

① グループ分け

② 現在と将来の人口構成は？

③ 集落の他出者の実態

④ 集落の不安と資源

課題 → 子どもの進学による教育費負担増や、医療や公共交通の不足への“対応や支援”を今後検討していく必要があることが判明した。

（3）第２段階　集落元気づくりの方向性（第 2 回ワークショップ）

① 参加者が希望する集落元気づくりテーマ

② 先行事例の紹介による情報提供

③ プロジェクト立案

課題 → 年配者や男性からの意見が強く、若い人や女性などからの発言が少なくなってしまうことへの配慮が必要であることと、先行事例の紹介にあたっては導入の経緯や工夫等についても紹介する必要があることが明らかになった。

（4）第３段階　自ら実行する意志　（第 3 回ワークショップ）

① ４面会議を用いた取組への合意形成

② ここから始めます（取り組みの具体化）

③ 集落の全体目標の共有化

課題 → 自分たちではできない課題にぶつかった時、人的支援や助成制度などのアイデア（情報）の充実が必要であることと、資源活用への知恵や情報助っ人が必要であること、さらに自分たちによる解決力を高めるツール（ネット利用や効果的な事例、制度紹介）が必要であることが判明した。

（5）第４段階　元気づくりの実施　（本調査においては未実施）

ワークショップ参加者が、自ら決定した元気づくりを実施する。そのためには、可能な限りの支援を各方面から行う必要がある。

第５章　集落元気づくりへの提案及び支援検討

1.　九州圏集落情報データベース(仮称)の作成

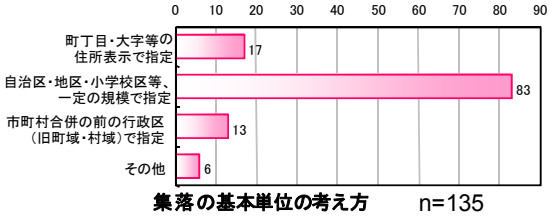
（1）本調査の成果・判明点・課題

①アンケート調査の成果・判明点・課題

○集落の基礎データは既存の統計データでは把握が困難

集落単位が自治体毎に異なるため、集落の基礎データは既存の統計データでは把握が困難であり、集落の実態を正確に捉えられない。

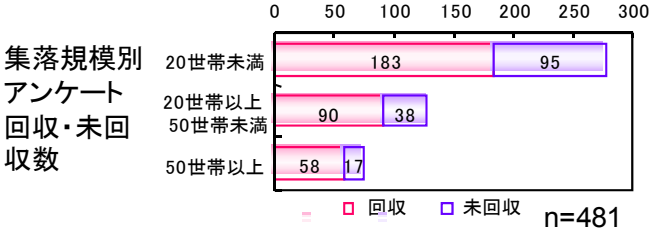
今後の課題として、集落単位の実態を踏まえて考え方の整合を図るなどの工夫が必要であり、また、集落支援を行うのに必要な基礎情報を独自に集めることも必要となる。



○小規模集落の実態把握は更に困難

集落アンケートにおいて、小規模な集落ほど、アンケートへの回答率が低く、情報入手が困難であることが判明した。

今後の課題として、把握が困難な小規模集落に対しても自治体と協力して情報を収集し、実態を継続的に把握することが必要である。

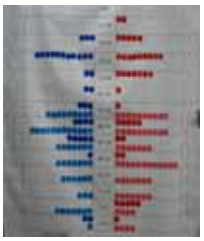


②ワークショップの成果・判明点・課題

○世帯毎のきめ細やかな情報分析が必要

世帯毎に実態を点検し、情報分析することにより、身近な集落支援者(他出者）の実態を把握できる。

八重集落の人口構成では、集落人口の2倍が他出している
また、他出者のうち、約3割程度が近隣市町村に定住している。



そこで、世帯毎の実態把握のため、他出者や世帯毎の不安等のきめ細やかな実態を把握し、その傾向を分析することが必要である。

（2）九州圏集落情報データベース(仮称)の作成（今後の取組提案）

20 世帯以下の集落の実態も含む、集落情報を継続的に収集し、集落元気づくりの展開に必要な九州独自の集落実態の継続的に把握する。

そのためには、下記の取組の実施が望まれる。

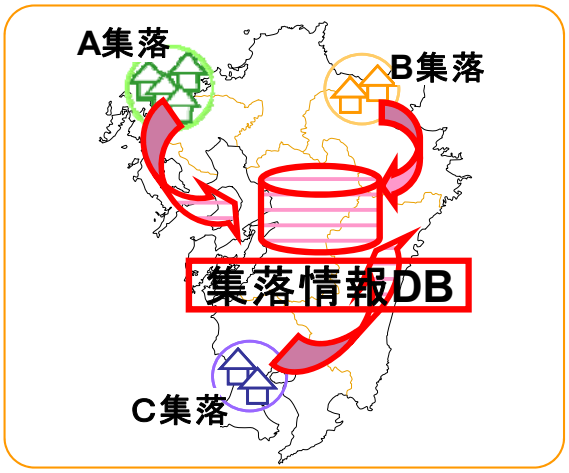
○自治体・集落からの定期的な集落情報の収集（アンケート）

○地理情報システム等を用いた集落データの集計・蓄積

○集落データの分析

○世帯毎のニーズ把握による他出等の傾向分析

○集落実態を継続的に把握



九州圏集落情報データベース(仮称)のイメージ図

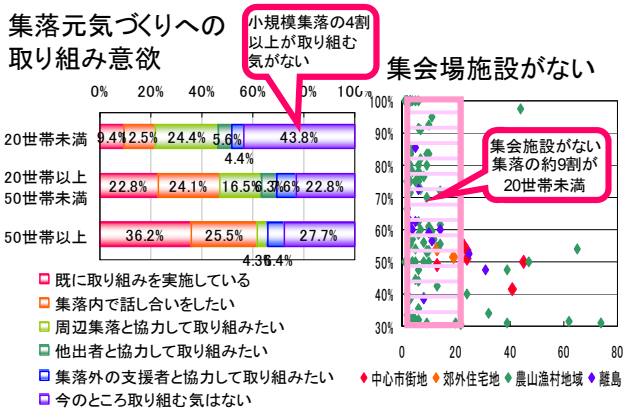
2. 九州版「集落元気づくり」へのきっかけづくりWSによる支援

（1）本調査の成果・判明点・課題

①アンケート調査の成果・判明点・課題

○小規模な集落ほど話し合いの場となる集会所がない

アンケート調査の結果、小規模な集落ほど集落元気づくりへの取組意欲が乏しく、話し合いのための施設が無いことが判明した。



今後の課題として、集落元気づくりの話し合いの場の創出に困っている小規模集落に対する支援が必要であり、また、小規模集落等、参加の場の創出が困難な集落においては、住み込み型をはじめとしたＷＳ以外の手法の検討が必要となる。

②ワークショップの成果・判明点・課題

○参加の場の創出でのワークショップ開催効果を確認

八重集落でのワークショップは集落活動のやる気（新たな取組）に結びつき、集落元気づくりのワークショップを、初期段階(参加の場の創出）に開催することの効果が確認された。

今後の課題として、九州圏特有の離島・半島地域等の集落でも実施し検証することが必要である。

③先行事例調査の成果・判明点・課題

○外的支援による集落支援のきっかけづくり

宇佐市院内町余谷地区は、10 年前に行政支援を受けて取組を開始し、現在は集落連携により自立して活動しているなど、先行事例調査において、外的支援により活動を開始し、その後自立していく事例が多く見受けられた。

今後の課題として、集落元気づくりへのきっかけづくりに向けた外的支援に積極的に取り組む事が必要である。

（2）九州版「集落元気づくり」へのきっかけづくりＷＳによる支援（今後の取組提案）

八重集落にて実証された集落元気づくり WS の効果を九州各地で検証する。その際、世帯毎の意向や他出実態も調査し、参加者の意志による元気づくりを支援する。

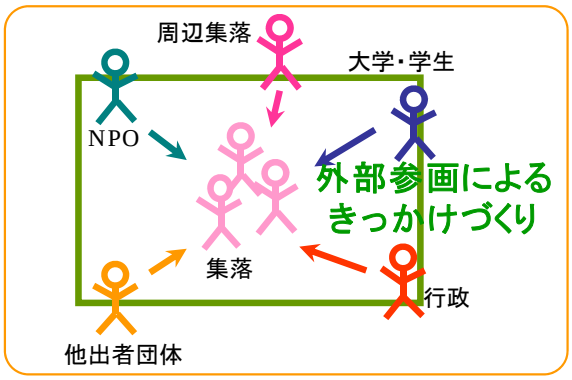
そのためには、下記の取組の実施が望まれる。

○ＷＳ開催を地理的条件の違う集落で実施（離島・半島部）

○ＷＳを開催する集落の世帯規模・高齢化率を変えて実施

○本当に支援を求めている小規模集落(２０世帯未満)へは再編も含めた支援策の検討

○ＷＳやその他支援手法について検討(地元団体による長期的支援、学生等地元滞在型支援のあり方)



九州版「集落元気づくり」へのきっかけづくりＷＳによる支援イメージ図

3. 九州版「自立的な集落元気づくり」の取組体制の構築

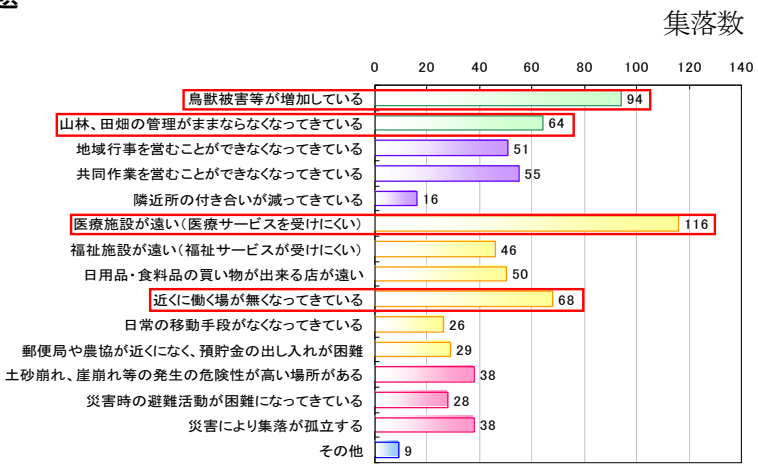
（1）本調査の成果・判明点・課題

①アンケート調査の成果・判明点・課題

○暮らしの不安の解消が必要

集落アンケートに記された暮らしの不安の解消は集落元気づくりのために先ず考える必要があるが、集落だけで取り組む事が困難なことも多い。

今後の課題として、人が生活を続けていくための不安解消が自立的な集落元気づくりにはまず必要となる。



○九州圏内で集落元気づくりへの協力意向のあるＮＰＯは約２００団体

平成 19 年度ＮＰＯアンケート調査において、集落支援を考えても良いと回答した NPO は

九州圏で約２００団体存在した。

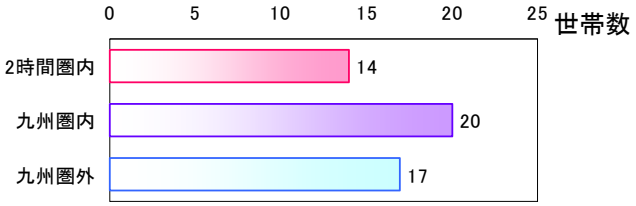
今後の課題として、持続的な集落元気づくりの展開には、新たな支援者も含めた支援体制を地域の実情に応じて構築する必要がある。

②ワークショップの成果・判明点・課題

○集落の近隣に生活する他出者の実態

八重集落の全世帯アンケートより、日常的に戻れる距離に居住している世帯も多いことが把握できる。

今後の課題として、持続的な集落元気づくりの展開には、新たな支援者も含めた支援体制を地域の実情に応じて構築する必要がある。



八重集落の他出世帯の居住地

（２）九州版「自立的な集落元気づくり」の取組体制の構築（今後の取組提案）

集落に人が住み続けることにより維持される国土の保全をはじめとした暮らしの不安軽減を図った上で、自立的な集落元気づくりの体制を検討し、構築を支援する。

そのためには、下記の取組の実施が望まれる。

○集落の暮らしの不安解消･軽減に向けた取組の推進

○集落再編や他出者等の協力も含めた「集落元気づくり」の実現に取り組む体制の検討・構築支援

九州版「自立的な集落元気づくり」の取組体制のイメージ図

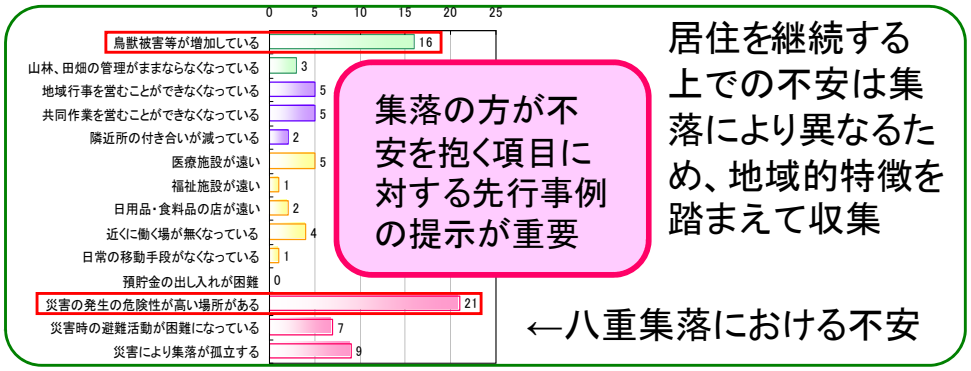
4. 九州版「集落元気づくり知恵袋集」の作成･更新と活用

（1）本調査の成果・判明点・課題

①ワークショップの成果・判明点・課題

○効果的な先行事例の紹介が必要

ＷＳでの先行事例の紹介は更なる深い議論のために有効であるが、事例が不足する分野等の補完が必要である。



今後の課題として、集落元気づくりに有効な多様な分野にまたがる先行事例を活用するための情報収集・整理や情報提供ツールの充実が必要となる。

②先行事例調査の成果・判明点・課題

○「集落元気づくり」に取り組んでいる様々な主体

先行事例調査において集落支援を行う支援者は。NPO、他出者団体、行政、大学等多様であることがわかった。

今後の課題として、集落元気づくりにおける支援組織、交流の場づくりに着目した事例紹介が必要である。

○集落元気づくりには取組を始めたきっかけやプロセス事例が有効

現在進行過程にある集落元気づくりの活動主体・集落住民に対する現地調査により、支援を受けたきっかけ・時期について把握したことで、プロセスも含めた助言が可能となった。

今後の課題として、現在実行中であるものも含め、事業進行過程にある事例を収集し、実現プロセスや課題克服への工夫等を整理し活用することが必要である。

（2）九州版「集落元気づくり知恵袋集」の作成・更新と活用（今後の取組提案）

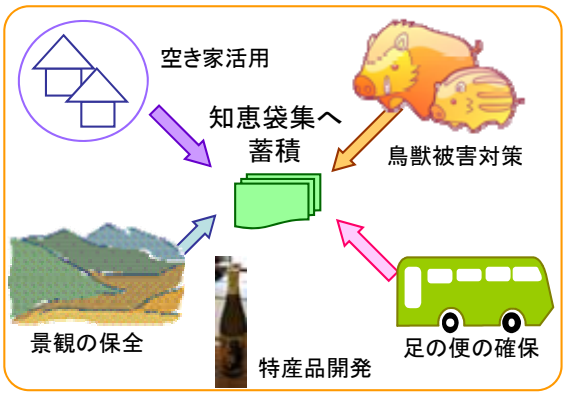
集落元気づくりを行う上で、集落特有の課題を解決するための知識や技の蓄積を図り、個々の集落に顕在化するニーズ(不安の解消）に合わせた集落元気づくりを進めるツールとして用いる。

そのためには、下記の取組の実施が望まれる。

○集落元気づくりに必要な取組分野やプロセスに着目した先行事例の収集・整理を、現地調査を基本に実施

○集めた先行事例をデータベース化し、知恵袋集として公表・活用

○集落元気づくりの進行に合わせ、新たな情報を定期的に更新



九州版「集落元気づくり知恵袋集」の作成・更新と活用イメージ図

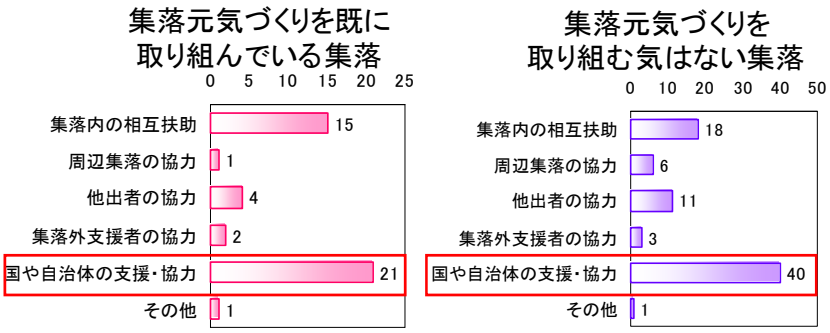
5. 九州圏の「集落元気づくり」の支援を行う中間組織の検討

（1）本調査の成果・判明点・課題

①アンケート調査の成果・判明点・課題

○行政への「集落元気づくり」への支援要望は高い

集落元気づくりへ取り組む気がある、ないに関わらず、国や自治体への支援・協力要望は高いことが判明した。



今後の課題として、集落元気づくりのきっかけづくりをはじめとして行政が関与する支援体制の構築が必要となる。

②ワークショップの成果・判明点・課題

○集落元気づくりを支える専門家の育成

集落元気づくりを集落にて展開するためにはある程度の専門性や経験が求められることが明らかになった。

今後の課題として、集落元気づくりに取り組む専門技術を有する人材育成の検討が必要である。

○ワークショップ後の実行段階での支援策の検討

集落元気づくりが実行される時の支援体制の構築と、その後のフォローアップが必要である

ことが判明した。

今後の課題として、実行段階において、集落及びその支援者が求める支援及びフォローアップの検討が必要である。

③先行事例調査の成果・判明点・課題

○住民の不安を解消する「集落元気づくり」への取組

鳥獣被害、生活サービス(医療・教育等）不足、災害不安、共同作業の実施困難など、集落元気づくりには居住継続に向けた不安解消が求められる。

今後の課題として、多様な集落側ニーズへ対応するため、産・学・公・民による横断的な組織体制による集落支援体制の検討が必要である。

（2）九州圏の「集落元気づくり」の支援を行う中間組織の検討（今後の取組提案）

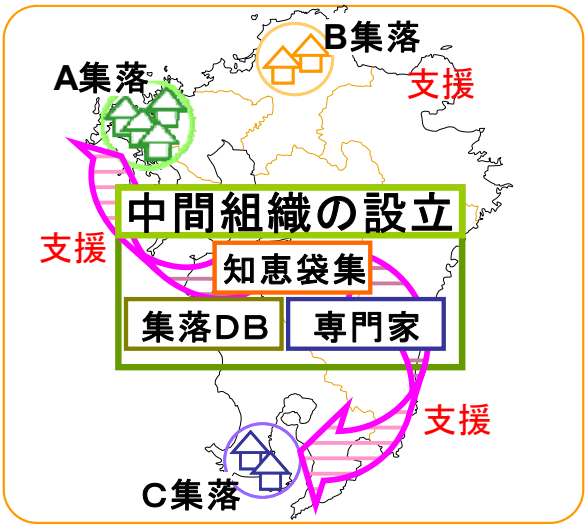
九州圏の集落元気づくりの展開に向けた直接的な支援や支援者・団体の人材育成への支援を行うため、集落に対する総合的な支援を可能にする専門家集団(中間組織）の設立を検討する。

そのためには、下記の取組の実施が望まれる。

○横断的組織体制構築に向けた検討

○集落支援を実施している・実施したい団体との協働的取組体制の検討

○集落データベースの分析、知恵袋集の活用



九州圏の「集落元気づくり」の支援を行う中間組織のイメージ図